



第 47 号  
 月 1 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所: 愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL: 080-2986-0856

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

古事記

宇宙の創始

— 実在 — (四)

神秘的方法 (ロ)

特にプロティノスについて

竹葉 秀雄

プロティノスの一者はただ世界を超越して存在する神ではない。それは個物の活動の本質の統一原理として飽くまで世界に内在するのである。併し単に世界に内在するのではなくて同時に之を超える全体的統一原理として超越的である。而もその超越的一者に至るには個体の多なる世界を媒介とするのでなくて(ここに問題があつて存在論を生み弁証論を生む。竹葉)之を否定し消滅せしむることに由つてする。即ち論理を否定し思惟を超越し、一切の対立の消える所に直観が成立するのである。此処に神秘的方法の特色があり、其の後西洋哲学に於て基督教の地盤にそれが移植せられると共に、愈々宗教的色彩を濃厚にして神秘神学の形を採るに至つた所以がある。

第五世紀の偽ディオニシウス書 Pseudo-Dionysius が神を「名くべき名無き輝ける暗」とした。これは如何にも老子の「名の名とすべきは常の名に非ず」と言い、「玄之又玄」と言えるところに似る。

第九世紀のスコトウス・エリ(ウ)ゲナ(SectusEri(u)gena, 810-877)が、「造つて造られざる神」の底に「造られもせず造りもせざる神」を考え、斯かる神が矛盾

を含むものとしてそれを思惟すべき範疇無きことを説いて、唯不知に於て直接に神と冥合するを得るとする所謂「否定神学」を大成したのは、神秘神学の最初の代表と目すべきであつて、これは古事記の「成りませる神」の底に「成りませぬ神」が考えられるのと同じである。

斯くてスコラ哲学の隆盛期たる第十三世紀にトーマス(Thomas Aquinas, 1225-74)の理性主義的な神学の影響を受けながら、超理性的神秘的直観に依つてのみ知らるる超対立的の「神其者」Gottner を「三位一体の神の前に考えて之を「無」Nichts としたエックハルト(Eckhart 1260-1327)日本に於ける神即ち天照大御神、君・民の三位一体の前の天之御中主神の世界である。

更に文芸復興の初期に其当時の精神に従つて個物の内に神の生命を認むる汎神論的思想を採りつつ、斯かる個物の多を一に統一する神が一にして多なる以上、それは無限大にして無限小でなければならぬ。即ち神は「反対の一致」Coincidentia Oppositorum である。斯かる矛盾を含む神に就いては肯定も否定も出来ぬから、これを判断に由つて知ることは出来ない。斯かる無知の自覚(所謂「無智の知」Doctaignorantia)に於てのみ神が現前すると説いたニコラス・クザナス(Nicolaus Cusanus, 1401-64)。天之御中主神の世界を玉で表している神道は円球的絶対界である。ここに於ては無限小は無限大に連がり、極右は極左と同一である。第六、第七……無限次元の世界である。始めとすべき始めなく、終りとすべき終りなき、肯定と否定と綾なして存在しつある、その存在を認めながら超えた「無知の知」の世界である。

尚近世の初に、従来の希臘哲學的神秘主義に於て単に消極的意義を有するに止まった質量に(前述プロティノスの項参照)積極なる意義を与え、之を神の啓示に欠くべからざる、神の内にあつて神に対する否定の原理たるものと解し、自己の宗教的体験を基として一層基督教的なる神秘主義を建てた、ボエーメ(Bohme, 1575-1624)。日本神道に於ては建速素戔尊の存在がこの意義をもつ。

右の如く、神秘主義の流は連綿としていつの時代にも有力なる代表者を有する。

特に神秘主義者と呼ばれて居ないばかりでなく、理性主義合理主義の代表と普通に考えられるスピノザの如きが、所謂幾何学的方法を標榜したに拘らず、最高の認識を理性以上の直観知 Scientia intuitiva に認めた事は最も注意すべき点である。

## 農士道

### 第五章 農士論

#### 第一節 農道的立志

## 菅原 兵治

### 士道の推移

一体日本民族は最も士道を尊重した国民である。然し長き歴史を有つ我が国に於ては、時代と与に其の実現に亦変遷があつた。即ち上代に於ける「ものゝ心」の道、王朝時代に於ける丈夫道ますつちのみち、武家時代に於ける武士道等は、内面的に之を見れば日本士道の時代的表現であつたのである。試みに 聖武天皇の御製として万葉集に伝わる

丈夫ますつちの行くとう道おほぞ凡ろかに

念おもいて行くな丈夫とせの伴

などを誦するも、当時の上下共に如何にこの「丈夫道」を重んぜしかを窺うに足るであろう。而して此の道——精神が武家時代に入るや、武門武士の間に体现せられて、茲に「武士道」となつたのである。しかも其の内容はひとしく士道である。而して明治維新と共に国民皆兵の名の下に、武士なる階級は徹せられたのである。かくて莊嚴たうげん比無かりし武士道は、抑も、今後何人によって継承せらるべきか。

一部の人々はいふ。国民皆兵の制度と共に、今や武士道は国民道として国民全体に普及せられるのである。然し孔子も已に「君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草、之に風を尚くわうれば必ず偃ひす。」「民は由らしむべし。知らしむべからず。」と言っているが如く、国民の大部分は寧ろ動かされる様に動くもので、之に向つて莊嚴なる士道の実行を求むるも、それは至難であろう。国家に士道を高揚顕章するにはどうしても其の中堅階級が存せねばならぬ。道義的存在が無ければならぬ。殊に従来の如く士道地に墮ちし世相を維新せんとする時、最も深思を強いられるものがある。士道を全国民に一般化することとは、勿論望ましいことではあるが、ともすれば富士の高峯を切崩して全国平均に地均ちひらしてしまふことになりはしまいか。

而して私は其の士道の実現に最も相応わしい存在の最も有力なる一つとして「農」を選えらぶのである。そは何故か。其の理由として左の点を挙げ得ると思ふ。

一、農は天地自然を相手として最も自主自働性ある職業たること。

二、農は祖孫相統の世襲的従業の可能性ある職業たること。

孟子も「富貴も淫する能わず、貧賤も移す能わず、威武も屈する能わず、之を是れ大丈夫という」といつているが、「人を相手とせず、天地を相手とする」農道生活は、現在制度の下に於ける俸給生活者や、商工生活者に比して、真に開眼されてさえ居れば、大いに此の大丈夫道の実践に相応わしい生活であると思う。是なる処を是となし、非なる処を非となして、千万人の誹謗に遭うとも断じて免職も転任もなきものは他の職業に於ては容易に之を求められぬ。次に一定の職分を通じて其の裏に士道を大成実現せんとするに当って、何といつても職業の或る程度の世襲的持続を必要とする。祖父の代は武士で、父の代は農業で、子の代には商業でということでは、其処に家風の存続なく、従って士道の大成に至難であると思う。武士道の大成も徳川三百年を通じての武士の世襲ということが与って有力なる原因ではなかつたらうか。其の意味に於て私は現下の世状に於ける士道躬行の適当なる存在として農を選ぶ所以である。而して更に其の効果の方面より見れば、現在の制度に於ては兵農一元であつて、現在日本軍人の中堅をなすものは農村出身の青年である。従つてこの農村人の生活に士道的気風あらしむることは、国民全体としての土風作興の上より見るも実に肝要なることである。かくて、勿論農工商各々其の中に士道を行じ、工士道、商士道的矜持あつて然るべきであらうが、少くも農生活者自身は他の如何を問わず、時によつては「一人出家すれば九族昇天する」といふ代表的の意で、此の士道を実行し完成して皇国に奉ずる処があるべきだと思ふ。

### 古写本を写す

三浦 夏南

今年には崎門学の写本を読み易く写すことに取り組んでいる。何故かと言えば、江戸時代の写本は基本的に片仮名で書かれており、濁点、句読点もついていないことが多いので、現代の我々にとって読みがたいからである。また、あくまでも写本であり、校訂されて出版された書物ではないので、聞き間違ひ、書き間違ひも時々見られる。いくつかの写本を見比べながら、自ら句読点を入れて、文章を見やすくし、片仮名交じりを平仮名交じりに換え、間違えた部分も照らし合わせながら修正していかねければならない。大変難しく時間のかかる作業ではあるが、古の人たちの苦勞を肌で感じながら、ゆつくりと学んで行けるので、今までにない学びとなっている。現代はあまりにも完成した本が当たり前になっている。専門の研究者が諸本の比較、校訂を重ねた上で古人の全集を出版しているので、誤りのない完全なテキストが当然だと思ひ込んでいる。それ自体は有り難いことではあるが、不完全なテキストに向き合いながら、想像力を以て古人の文章に触れて行くという機会に失われているのである。今回、崎門の講義録による四書五經の学問に着手するに当たつて、校訂されている崎門の講義録が極めて少ないことに驚き、嘆いたが、自ら校訂する楽しみを知ることが出来たのは、嬉しい発見であつた。本居宣長先生の古事記伝執筆の偉業には比べようもないが、先生の古人のテキストとの向き合ひ方の一端に触れることが出来るのではないかという気がしている。

現代は恵まれすぎているが故に不幸であることが多い。農業では機械化が盛んに行われた結果、便利ではあるが、田畑から家族の姿が消え、引退後のお年寄りが一人で作業することが多くなっている。武道に於いても戦争がハイテク化したことにより、人と人とのぶつかり合いの戦がなくなり、祭りとしての武は減びて、外交の延長としての策謀に満ちた牽制と恐喝があるのみである。学問に於いても完成された文章を読んで、理解し、実践することが当然とされるようになった。勿論、学ぶ目的は心に会得し、身に行ふことではある。しかし、その学ぶ過程の中で、文章に親しみ、古人の精神を愛して行く、涵養の時間があまりにも少なくなっているのである。テキストに誤りがなく、解説があり、文字ごとの注釈説明があることで、

理解することが容易な分、分からない時間を味わうことが出来ない体に我々はなりつつある。朱子の『近思録』の中に仁の意味を問う章がある。その答えとして、論語孟子に出てくる仁に関する章を繰り返し味わうことが肝要であり、その会得に二、三年かかっても良い、とある。安易に仁という言葉の意味を弟子に教えず、自ら古人の言葉に親しむことで、黙識することを要望したのである。現在では、昔の難しい言葉を分かりやすく現代風に説明できる人間が賢いとされているが、古の教えるものの態度は、それとは真逆のものである。我々は専門の写本と親しむ中で、古人が大切にした学ぶ過程の重大さを噛みしめて行きたいと思っている。

### とよくも農園だより

今月は義妹の出産に備えて、私自身はあまり外に出て農作業をしていないため、家の中の事について書きたいと思います。

一月号では今年目標をいくつか掲げていましたが、現在三浦家では伝統的衣食の習慣化を図っています。そこで以前までのメインメニューだったパスタや肉を一切排し、ご飯、味噌汁、漬物、納豆を中心として週に数回魚を頂くという食事をしています。さらにその質にもこだわり、味噌も出汁から、納豆も漬物も自家製、おやつは手作りあんこ、わらび餅、甘酒と、食事を一変しました。今まではほとんど毎食お肉やパスタを食べ、おやつは洋菓子の生活だったため、慣れるか心配していましたが、案外すんなりと移行でき、家族も日々のご飯を楽しみにしてくれています。

その分、料理にかかる手間は大幅に増えました。豆乳から豆腐を作ったり、小豆を炊いたり、納豆菌を大豆に種付けして納豆を作ったりと、どれも手間のかかるものばかりで、子どものお世話をしながら、朝から晩まで暇さえあれば台所に立つ毎日です。大変ではありますが、食事は毎日の生活の根本なので、鮮魚が買えるスーパーを探したり、より美味しく作れる方法を本やインターネットで調べたりして、家族が喜んでくれる美味しい料理を日々研究しています。

二月十一日、義弟の長女・静（しずか）が元気に生まれ、三浦家がまた賑やかになりました。静



三浦 美恵

はよく眠る大人しい子で、元気に動き回る上三人の男の子達の中でも気持ちよさそうに寝ています。義妹も帰宅し、二人目育児に奮闘しています。腕の中で一生懸命に泣いているこの子が、これからどのように育つのだろうと思うと、成長が楽しみです。

今月の農業はネギの収穫、朝晩のアスパラ収穫と温度管理、里芋とネギの畑作りをしました。厳しい寒さの中にも暖かな日差しが降り注ぎ、春が近くまで来ていることを感じます。二月は、元気いっぱいの上の子二人、光・蒼とともに、たくさんの農作業ができる一カ月となりそうです。



### ★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

### ★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

### ★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円